

中東へ 岩手から祈り

ヨルダン出身 マラク・アブダヤさん

平和願い 慈善活動に力



「故郷ヨルダンのように、岩手でも若者の力やアイデアを集めたい」と語るマラク・アブダヤさん＝盛岡市

ヨルダンの首都アンマン出身のマラク・アブダヤさん(22)は、結婚を機に移住した盛岡市で国連児童基金(ユニセフ)のボランティア活動を続けている。祖国周辺を取り巻く中東情勢は戦火が拡大し「つらい日々を送る人たちへ岩手から力を送りたい」と祈りの日々が続く。5日は市内で現地情勢を語る講演会に臨み「中東の現状や、若者は無力ではないことを伝えたい」と訴える。【関連記事4面】

「戦争に勝者はいない。戦争には価値がない。子どもたちの安全が守られてほしいと心から願っている」

パレスチナ自治区ガザ地区を着火点とする紛争が、ここ数日でイスラエルのレバノン地上侵攻、イランによる報復ミサイル攻撃へとエスカレートする事態にアブダヤさんは2日、苦しい胸の内を明かした。

ヨルダンは比較的治安が安定しているが、イラクやシリア、イスラエル、パレスチナなど紛争当事国に囲まれる。国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)によると、ヨルダンの人口に占める難民の割合は昨年末時点で16人に1人と世界で5番目の多さだ。アブダヤさんが暮らしたアンマンの学校は、シリアやパレスチナ出身の人がいて身近な存在だった。難民も国内で普通に暮らす人と、難民キャンプで生活する人がいて「あるキャンプではインターネットが使えず、外の世界を知らない子どももいた」と振り返る。パレスチナ出身で、ユニセフ・ヨルダン事務所の警備員をしていた父の影響もあり、幼少期から慈善活動に興味を持った。「隣国が大変なのに見て見ぬ振りにはできない」と国連イベントの運営などにボランティアで携わった経験もある。結婚を機に昨年3月から盛岡市で暮らしている。今年に入り、県ユニセフ協会内にユースチームを立ち上げた。世界の子どもの現状について多くの人が学び、意見を交わす機会をつくるという意図がある。

5日盛岡で講演 「現状伝えたい」



アブダヤさんがボランティアとして携わった国連イベント。2022年10月、ヨルダン・アンマン(本人提供)

県ユニセフ協会の講座「中東地域のことを学ぼう」は盛岡市大通の岩手教育会館で、5日午前10時から正午。アブダヤさんと、同協会花巻支店の佐藤教士会長が講演する。電話や応募フォームから申し込みが必要。問い合わせは、県ユニセフ協会(019・687・4460)へ。

30歳以下の人口が全体の7割を占めるヨルダンは10、20代の活躍が目立つ。そんな故郷にならない、アブダヤさんは「若者は多額の寄付も支援もできないかもしれない。でも、アイデアを集めて大きな力にできる」と力を込め、5日の講演会では、遠く離れた中東への心の支援を届けようと呼ぶ。



申し込みはこちらから

「泣いている隣国の子どもたちのために行動したい」と訴えるマラク・アブダヤさん 5日、盛岡市大通



ヨルダン出身で盛岡市在住のマラク・アブダヤさん(22)は5日、同市大通の岩手教育会館で講演した。戦火が広がる中東の現状を憂いながら、国連児童基金(ユニセフ)の活動に関わり「泣いている隣国の子どもたちのために行動したい」と訴えた。

アブダヤさんがスタッフを務める県ユニセフ協会主催の講座の中で約60人を前に講演。アブダヤさんは現地の写真を見せながら「同じクラスにシリア出身の難民もいたが(ヨルダンと)同じくアラビア語を話すので楽で壁を感じなかった」と学校生活を振り返った。

イスラエルなど紛争当事国に囲まれたヨルダンで、アブダヤさんはユニセフのボランティアを始め、結婚を機に移った盛岡でも活動が続ける。同協会内にユースチームを立ち上げ「人の痛みに寄り添い、世界や社会を変えられるチームにしたい」と意気込んだ。

「子どもたちのため行動」

アブダヤさん(ヨルダン出身、盛岡在住)講演